

玉淵集

三



特別
子12
3643
45(3)



音曲玉淵集三

夫音曲の起るハ神樂催馬樂等より出ル也

神樂カクラサイバラ催る樂ヲりて大内神前ニ遊曲ヲして文樂ヲあり

祓糸管絃ハ役者ノ舞多キきは万人トして何レ事ナル

たろシを聖徳太子ノ時分ハ秦河勝ノ命トして天下

安全ニため又ハ諸人ノ伎樂ヲはハ三十三番ノ 葫蘆集ハ
三十六番者

面ヲ作ルめ舞多ク乃役者ノ被略シある拍唱ヲ奇ヲを

加ヘ舞樂ヲをなきシ其樂ト申樂トナルガクトハ是則神樂

の神ニ字ヲ乃偏ヲ略シたるナり然レも今レ能クの

玉淵集三



如くよはあく和をせつけ只うちをよして一曲一柱ヒトカサテの事
よありとちり物に後小松院人エ百代の清宇ニ麻苑院
相國義満公北山殿武家れ極楽乃とある其比竹田服部
やよあ人音曲れ名人よりに仰有て右の申樂と再
奥く今能ウラといふお出来たまらりて今更りて
きく發向せしなり昔ハ朗祿白拍子あとをもうたひ
柱てし今と堂上方よはまもあも也披ヒカウ禱あとい今
も各れ誦教よりいをを月吹すれも地下人なるの
短ひよはありかた事お祭

推古天皇人王ノ時聖德太子利國安民ノ為ニ天地ノ神
ヲ祭レ此時三十六番ノ面ヲ作り奏ノ河勝ヲシテ樂ヲ
作ラシテ神事ヲ掌ラシムソノ樂ヲ申樂ト云コレ神ノ
字ノ偏ヲ略セルリ村上天皇人王ノ時ニ至テ河勝カ遠
孫奏ノ氏安ト云者アリ三十六番ノ面ヲ傳ヘテ申樂ノ
業ヲ繼クソノ妹婚紀氏某ト云者アリテコレモ共ニソノ
業ヲ為リ氏安三十九世ノ孫ヲ竹田某ト云金春ト称
ス能ソノ業ヲ傳フ其比伊賀國ノ服部氏某ト云者申
樂ノ業ヲ好ミ和州ニ移リテ乃千姓ヲ更テ結崎ト云ヒ
又長谷寺ノ佛ノ告ナリトテソノ名ヲ觀世ト改ム申樂四
座ニ分レテ相共ニ春日ノ神事ヲ共ニ四座ハ結崎觀世
圓満井金春座 外山保生座 坂戸金剛座 稱ス四座ノ分レ山城攝

津ニ在テ賀茂住吉ノ神事ヲ勤メ又伊勢ニ在テ
大神宮ノ神事ヲ勤ムコノ外他國ニモ多ク散在セ
リ觀世カ一男ヲ世阿弥ト云容貌甚々美ナリ鹿
苑院殿コレヲ愛幸セラレ且ツ其業尤モ妙ナルニ
ニ申樂ノ道盛ニ世ニ行ハレ伶工ノ業コレヨリテ衰
タリ世阿弥八十一歳ニシテ普廣院殿ノ時死ス世阿弥
子ヲ音阿弥ト云殊ニソノ業ニ長セリ世阿弥弟アリ
四弟太夫ト云コレモンノ業ヲ能セリ音阿弥子ヲ重光
ト云コレハ能ク鼓ヲ擊キヲ以テ名ヲ得タリ

右ハ翰林胡蘆集ニ見ヘタリ

一と云ハ此音曲あることとも祝儀といへ上ハ天子
らり下カ臣より迄能トヤビ嘯子シユを主とする事不レ以レル
む拍子といふ事取レれ拍子といふ事付て人ハ脈ノを
作り出レたることハ或ハ漏ロツ刻コウなり他レりハ或ハくハも
拍子ハ天生レ理ヨて有物ハ拍子ナ死トりハ事ハ人ノ間
平生の言語ウフトフトより皆拍子ナり然ルにハ強ハハハハ
拍子ニ槌ノ定規キヤウギを定めテ乃チ伸縮ノビに規矩準繩キククニシヨウを
備ヘり是則チ大小ノ鼓ノあり此定規ヲ定めてレれ
よ志スルハ伸縮ノめルにハ取レれハ或ハるハやうニ強ハ乃チは
えレをレ作ル事ハ人ノ作トなるハ是レハハ西國

乃ち此令奥列乃果の人と行あひ視合てもとらひ
又とく更下掛平と流儀とくれとも或は北の玉を行
地よりたらしむ板ハ少苑所ハ此指合あさされはぬ遠ま
て拍子乃定規たるゆへ事ハ是か一又古流尚流とく
文句所ハ少流ハ此習りぬ何事とも拍子になしてハ首
より今よりハ事なるぬハ人間自然のた理ハ叶ひぬ
ゆ所なれえ来樂之神代の樂とて而され拍子あり
其ゆれ拍子に何やを付て短く寸尺を極め三川地乃
拍子を定めすぬらちされハ和歌ハ七五の文字を切合せ
たる義あり故天地自然乃拍子神代ハ樂より作り出

世風不なまは昔より今ハ形像よりカ一勿論ハ未たと
ハ千年を後くとも此拍子成ハハ事ハなるぬ道理あり
去に依ていつも砂赤ハ井角ありて日一音を穩ハ舞
ても夜ハ極真ハ成なりハハ音曲乃祝義ハ用ハらま
ぬハ定規の拍子あき故なる樂

一謡ハ元来長音をつゝ祢方物故文句ハ五七五七とわらぬ
是和國ハ風なり七五合せて十二の文字數ハ而たは拍子ハ
ツ也ハ時をいままハ大小の數もわらぬ所是拍子ハ盤觸也
觸也とも十二の文字不足ハ時ハ數乃けけ声をかけく
是の數ハ合す形り

整 ^二アハクシヨウフマシツキタニ 十三 切切て止ぬル

芭 ^一あにちろれろうたひき 十一 ヤトクワて十二

淳 ^一人わしもなるうーく 十 ヤトクワて十二

新 ^一どころきあへりへれ 九 ヤツラトクワて十二

榎 ^一きにやろーをたろく 八 ヤツラトクワて十二

故 ^一青陽のちろれ何しよま 十三 かげの拍子よてせいノセ
字ヲ切切ノ内へ入ル之

曲舞乃出に陽す拍子有ハヤカへては格也

白 ^一やまのふたに 引元 文字六ツ

老 ^一わろろりもあは 斤地 文字九ツ一ツ地凡云

かやろり程の詞文字はくあり出未足は随ひて拍子

もまのしんぢやーやせらまらも日一第日一拍子に
斗りてハあやをあすりあき故は文字凡そあまをぬ
ーあく或は平一引ろりひあきとせたこひあして
拍子れる合二くちまたり鼓も勿論久しれ何やと振
てあともる答をひくハ遠ふ事あぬなり

東 ^一生をろくあまあせく 十一 切切て止ぬル

榎 ^一口いさ川のあまあせく 十三 切切て止ぬル

章 ^一をのそみこれひさくろ 十 ヤ
脊 ^一やまの柳これろろく 十一 ヤ
法 ^一かまけ敷ころろろ 九 ヤ
整 ^一ハちあしよたけまひぬと 十三 ヤ

安きふかしのしり
山伐木たうくくして

実 まいごさひりり
後 りにやんろむやの

ま くれ生死よめりし
柏 一色りする村えれ
松 老少といひて分別か

ハ ヤツラ
土

七 ヤツラ
九

十二 かげの拍子
十三
十四

＊は文字数多少あまともしりの都合伸ちみまて
みまあ乃ありの定格は合りなり

一 矩乃拍子カキ事

但如の位より又別位の事へ也

右より中間一尺

大教のちみす
小教のちみす

定ル文字十二也

キ上モ一尺

キ切モ一尺

引取又寸 定ル文字六つ之

行地七寸五分 定ル文字九つ之

シクリ一尺二寸五分

如は寸尺は定ての教へ也依去引九二つを中間一ツ也引九

行地ト合せて一尺二寸五分ニ故シクリの事にあ小也は介は

キサこ返しハキ切の略又寸の事也大カハ二尺 大折 或三尺

四尺の事也 先モ番敷 合別返 上掛下掛 松直 老少のキ切

胡長 三世十方のキ切 蛭 ハ筆の次キ切 是ハ又寸の事カケ

鼓より返り返る事也 芥子秘傳の拍子園寺小所

或ハ撥物等に各少宛変りれは右の内より出るる拍

子なり 中間八ツ拍子の内大教四ツ小教四ツ也文字数

十二の内七文字ハ大教の事又文字ハ小教の事と定む事なり

先來者六六ト云々也。又云くさうく字より大教者
 故に字ハ空ヲ有り明き候ふト小教ヲあづかり也
 ともいふ所ノだ字小教ノ前ハ空ヲ有て年竟六六ト
 教ハまゝの心也

一而たき拍子規矩の圖

拍子		小教		引元	
か地	か地	か地	か地	か地	か地
た	ヤ	里	志	王	ヤ
ア	ア	イ	の	ら	り
ま	か	ふ	ふ	む	す
ア	か	ら	乃	ら	か
な	い	す	み	さ	せ
こ	ら	も	さ	死	の
よ	の	と	ま	れ	
い	か	と	つ	す	
き	む	い	ら	里	
き		せ	ハ	こ	
里		い	ら	乃	
い		よ	き	も	

教後切				か地		
か地	か地	か地	か地	か地	か地	か地
こ	た	い	イ		ヤ	フ
何	よ	ヤ	ヤ	残	ア	ら
と	の	じ	ア	又	さ	片
る	と	乃	ハ	え	ん	性
か	い	た	ツ	せ	か	こ
み	フ	あ	ラ	ん	い	ま
と	ち	れ	ヤ	乃	又	を
と	じ	あ	ア	ま	る	あ
け	く	い		う	て	ん
と	ひ	た	ハ	い	ん	す
め	き	よ	ア	う	て	あ
て	の	ハ	せ	乃	な	よ

如以十二の文字教は而して拍子ハツを切合たきを四乃文字
 空ハ新清所ハれえこひのなるにたえこひを弁へぬる拍
 子にこれをもせかまらざる也。想して筆ハちまれも速速よ
 而して拍子よく是天地自然の拍子なり

卦の名を後とす

一ハ陽タト云 一ハ陰タト云 氣ハ下ヨリ發ス 卦モ下ヨリ畫ス

乾	夬	大壯	泰	臨	復
純陽	一陰 五陽	二陰 四陽	三陰 三陽	四陰 二陽	五陰 一陽
四月 巳	三月 辰	二月 卯	正月 寅	十二月 丑	十一月 子
律	律	律	律	律	律
中呂	姑洗	夾鍾	大簇	大呂	黃鍾
雙調	下無	勝絶	平調	斷金	壹越
巳時	辰時	卯時	寅時	丑時	子時

坤	剝	觀	否	遁	姤
純陰	一陽 五陰	二陽 四陰	三陽 三陰	四陽 二陰	五陽 一陰
十月 亥	九月 戌	八月 酉	七月 申	六月 未	五月 午
律	律	律	律	律	律
應鍾	無射	南呂	夷則	林鍾	蕤賓
上無	神仙	盤渉	鸞鏡	黃鍾	鳧鍾
亥時	戌時	酉時	申時	未時	午時

如州循環して又一陽未復の月より及て黄鍾越の調子に
 ぬなり十二律といふ八熱名して分ちいへる十一正三五七九の六

陽月と律と一十二二四六八十の六陰月を呂と多し也律ハ
法あり呂ハ助ありと有て礼記礼運ノ注也律ハ法也象象義也
呂ハ律を助くる義よく妻の夫を助け臣れ君を助くる
同一義あり男ハ女を統へ君ハ臣を統へ如く陽律ハ陰呂
を統へへは兼合せて十二律と称するなり

右十二調子の内五調子とて主と係調子也

壹平双黄盤 いふ調子とて十二調子を統合せ

ゆなり然とは又調子を熟煉せん事音曲の要法也

壹絃子断念うそに平ハと寅

勝後下辰無双調は己よ

危種キキひまヒマ黄種キキひつヒツ鸞ルンハハさサ家カ

鸞神ルン仙センよとをヨトカカレレ時トキ

斷金ハ 壹越イツ出シュツ △勝絶下無ハ 平調ヘイ出シュツ

△鳧鐘ハ 双調ソウ出シュツ △鸞鳥鏡ハ 黄鐘ワウ出シュツ

△神仙上無ハ 盤法パン出シュツ調子也

十二律ハが来縁竹の調子にもちイナたる物なまは上古の
神樂サイバ儀ギ樂ガクの縁竹イナは合するツク神カミハハはハ調子第
一イチは吟味ギンミせるセへヘ一イツ徳曲トクキョクハ調子ハ能ノウ嗽ソウ子シ妻メ祝イハヒ其ソノ時トキ其
場バの相アイ應オウを才サイ一イツして平ヘイ竟ケイ縁竹イナハ律リツは合するツク如ニ
あハハハ呂リョハ地声チセイハハルトルト高タカキト又たマタぎりギリて高タカキト又位也

然とは イッヘイサワワバン 平双黄盤の五調子にて是なりは五調子
 昂ち五音にて十二律ハとのつと然るなり十二律分まきさる
 時は五音明らるる故に古來と多くと記述た
 あり

五調子	五音	五音通	五季	五方	五行	五色	五臟	五味	五竅
壹越	宮	喉	土用	中央	土	黄	脾	甘	口
平調	商	齒	秋	西	金	白	肺	辛	鼻
双調	角	牙	春	東	木	青	肝	酸	眼
黄鐘	徵	舌	夏	南	火	赤	心	苦	舌
盤涉	羽	唇	冬	北	水	黒	腎	鹹	耳
	<small>アイウエヲ ヤイユエヨ ワヰウヱオ</small>								
	<small>サシスセソ</small>								
	<small>カキクケコ</small>								
	<small>タチツテト ナニスナ ラリルレロ</small>								
	<small>ハヒフヘホ ミムメモ</small>								

右五調子をつくさるりて四季方角を宛南せなり是に
 よりて或は次第まゝなりと双調小向乃度交なりハ盤
 涉と魚合より調子にて遠小て物へ一とヤ傳小なれと
 冬小向の度交ありとて神めより盤涉もおお魚成
 一調子ハ年竟臨機應変とて其時よのりてハ
 相應する事もおも交ちるなりも秋ハ平調より出
 たゆり融とくと貴人ありとあり音に清遠小向ハ変
 して其調子よりついでハ叶ハさる事あり勿病をとい
 独吟よても大度交小度交ありの弁へと近等れお魚
 も有へ一只切者よゆりてをのつと相應れ調子出へ

三三
熱して助音とつこー或は同音あるの時ハ亦此視字
を字合とろふやうに視ふやうに安なり

内 初心の人同音の時視字遠よと思ふ一とまり視止て字合ま一

うこりんよてしをむきくはーはー

短りまこやて成ま川 視小をー

さーらりく 視小視字を双視ッ

乃らろ 菱種 盤法もよー

一機

説文ニ 主發謂之機スルヲとらて何よらるハ物を發生一

動事スをほつさとゆ々機ハの一字れ持あ乃字意あり

それ故大学れ其機如也とあり視よと機發動所由とら
て所由とつハ善惡ともに國家れ大事よ何れら
とよ付てかやうに何れハ何故と發を指て所
由とつハ所由が即ち機スナハの字れ義也と釈一々機
乃字を事のキガことよの注あり又其下は機弩ハキト
牙也とつよ注もて大金弩ハ大弓オホユミもて其弦ツルをかか
下を牙とつよ機が即ち其弩牙の事也と説て是
ハ機をユハツとつ訓義よ見て矢を放つて中ウチを
つよハハツのちあれ石にありとハ亦視あり又易言ゲニ
行君子之 樞機也樞機之發榮辱之主也とらて安

よきハ言行の善悪に付て其起る所を門戸のクニ、
ろのハツよたどくろ又木偏のモ幾も通一幾
密にけいさくろ字心よて書經ニ人君の政をさくく
一日二日萬幾とをを一日二日ハ萬機とも書換て是は
政事ハ大切の事あるは主極綿密よ謹を用ひ行
ひ出すへき事也と其政の事をも機といひたる義あり
又孟子ニ機變之巧とあり莊子ニ機心機事ありと
ハ事の便利をさくろもそを考へて心よ又これ
アマツリをなすをさくく機と記てあり又これを
織乃具よ機杼とつおあり是ハ梭の類いよめ

機糸をつくひ多々れやとり成るに利ゆる道具
ありそれゆ機乃字を主にハ父も訓する也孟子
此母乃孟子ハ字同懈怠をたやうふとすめれたため
織ろけい家をさ断て見せよまたつあ断機と
有あり起して此機の字ハさぬくれ義何れともあ
らま一先名ろれ字心よて畢竟ハ説文の主發といふ
乃字義は帰する事あり發する所ありけれ音曲の
根元を考ふゆ機乃字を大切よを成事也花傳書乃
一調二様とある機れとつりをかの機乃書に大くこ
た織家うへり多のこまく堅いと機いとつろひやう

よそあそびに紋柄をあるとよし所をわのそく視ひよあ
何やよ引合せていなりむあるやうよあやれも実を
機乃一字れ沙汰よくなく調機聲もに合せその
内よとあし声のほくひやうを主りて説きするあにる
ゆありまぬる三々に名姓をゆくるは是一門はく乃
義を明くしたるち知へき事なり聲れらやをあ
す亦は又別條乃沙汰ぬへー三々に中よては機と
りあ所要ありはく明へー

一聲

声ハ身れ内ノ風よてカキカタニテ肺下丹田よりカキ肺ハ肺を

門戸として喉へ出るおあり是風の義を明すへー

華子ニ大塊之噫氣其名為風大塊ハ天地の裏也とて噫氣ハ息也

之來風生於空谷コソヒク大山の谷底大海に淵

竅より吹出んものなり人れ聲ハ身乃内れ風よあ

真言の書かともも人身中チクツダナトコニハフ有風名显陀南是云丹田

と云々あ丹田ハりと定りた家歌なく人身れ空谷乃

やうあ氣場所なり人の令府メイフ氣息乃根がゆへに

道家よて呼吸吐納コキブトダフれやーかひよ丹田を守家とよ

事哉主ニユして説も是ゆへのり也考れえ天地の息

ハ風よて風が昂ち天地れ声人ハ丹田乃息が声よて

聲ハ昂ち丹田此風あり天地乃るに去るくも風が注
 ぐれそ天地が去る人々の才も息が移まは生命が終
 承なり声を腎じんれ膀胱より出るといへたるは何れ腎
 ハ水府もそ居不ハ脊せは属しよ一秋あり分量ありてあ
 らあをつうさざりみざりに浮動フドウせぬをりく巻ひ
 こそすおなりされども腎水れ精氣よりのあ丹田乃
 田地を帝ウレホに潤うる一喜ひあ氣をりりく聲とぬを
 きは声ハ腎より出るといふと僻ヒガコト云は何れ腎より
 出るといふて去るをすうよてハか一わやうに水分れ
 助けを以て出故聲一ようあり一きもり喘ヒハカレ涸

たると或は大音もあれ又小音も是皆人て生
 付れ腎氣の色と長は依てのり也爰ハ人て生得乃
 上にかまらう所少くは聲れ必安を反強曲者れ
 うよてハ強ナニせんといふより一潤二機と立く
 声を反末にいひたり叔聲一丹田より肺乃膀胱へ
 うはり肺より口へ出るとして三切は階級カイキヤ何りて出ると
 ハ何れ元もとに發するとなきは一枚ヒトは如く出故也然る
 たる強れ声ハ上より下よりあく非色皆肺下カイカより乃強
 と安あき事あるた尤な知つうんとあれ右より
 身中より風が外れ風を引て丹田より出りて声を

に皆修りの未熟ゆへあり祝言幽玄悲慕氣傷より乱
曲よさらまで平竟以理なき合息せは所なく位修ハ
其物これ上よ付別修する迄のりまで修し先所よ及
てハ是よさら修しむらうとて事ハ有ま一徳曲の
よ限しむと修くれうたし物乃修行よ世調機聲
の工支所要たる

一音聲の辨

説文^ニ 音声也生於心有節於外謂之音^ト 宮商角徵羽聲也

金石絲竹匏土草木立音也

字彙^ニ 實而精者曰声^ト 朴而浮者曰響^ト

毛詩序^ニ

聲一成文謂之立音

礼記月令疏^ニ

單出曰聲 雜比曰音

書經^ニ

歌永言音依永律和音

書經ニハ音ヲ二字ニ声ノ字
ナレト註ニ音ノトアリ

声と音との分別ハ聲ハ何乃小也分く去聲に如
物ありされは克沃又此付ハ文よて是音也そとん
カキクとつやうよ純一は出らハ聲也そ物よ克沃を
れ付てカアキイクウ或はアアエイあつ小如きハ音も
ふのま一とらうよそわやう物を音とつ小也夫故音れ字
乃が訓を子トモヲトモよみて平竟声れ修き也その
ひがたハいと声より教するゆへよすぐよ是をコエと訓

せり声はは多しり少と音の事也 正字通ニ 聲タイメ音フキハ對言
則別散則相通スガハと云え来去ハ伴音タイハ別ヨウかれん声
乃こそ音に返らぬと云ふはなく音として聲より出
ぬなり一平に相部さうるに古今に書く聲音の
二字ハ通用して是を筆せり宮商角徵羽を又音音
とも又聲セイともしむ也去形う持てく此物ハ別れ
ゆり上に就く其主とする所を以ていふ各音別を
有へ一今日人此静と相部さうるハ声なり其乃よ去
或は悦い笑ひ又ハ物を嘆息タニソクす所事句ともは音の
ま一歌うあれとも主とも云ふハ声なり去く國々

呼コけなりごとしり小付ハ自然と去聲をもく記き生ん
是ハ音あり又強の一むき又物くつた初ハ声なり
不き音とも分りへ一む初めと音の入不ありなり
内よと声も別とされ主とする所をまうらへて去
あり物も多歎乃さへり鳴た風水れどき金石
絲竹匏土革木ハ八音のたらしめ鳴たハ勿論音也
然中持持ツキカチありハ音れむく大物あり受をり
ちいされ物音も亦類を推て知る一平音は決モロクの
声ハ内に鳴た物ハ聲乃何やを成不ゆくに調
子を物要とする故なれより音を主として

音楽といひ音曲と称するなり

長短大小清濁高卑 是を音
声トヲ考ヘ

一聲れつらひやう乃復

声を夢にはりて吉其内室中よりつらひを考一とい
いんとあれ肺ハ肺カカ五臓の花蓋氣元なり也
いふ又行死してハ肺の肺を令。腎水なり金生水
道既して腎乃西に肺ハ母なり故に夢に肺より腎へ
水を合カするなり然れども冬ハ水ハ主家時して水
なり故に肺より合カを後ハ依之夢より肺カカ
かまは多聲一ても肺氣つれを肺腎ともにさか
ぬ内よりいれせぬ高にまゝ急を一分はく事也

相ぼひやうさへくハ傳へ是ありといふも其人相
なり初子よて音下考も自由を考やうにつくよてはし
下音れ人とかはく音にほひ物まはいつとなくる声
よぬりのあり夢に初子むきく人と敵と相痛ハ時ハ次
等に声よくぬり目前ありむ其人ハ聲のむきよよ
又又氣カよも依へ一先摸の声をさすけ堅れ声と女
押てはよへ一横堅ともにある声を相音とり小也
菴角聲れむきた家時矢りドとつよを一こ急を
ほりて能き人を起すよつうれて能声有へ一曉聲を
つめよハ少食を丹やうを菜を吞て吉板又つよく

寝るに有へんいぬまははよるこゝろをいふ也
 毎日毎夜つゝ時を聲で鳴らすも素に事りか
 と能出のありはよくわづら能出のあり返す声
 此出所つゝいふを能味してはよへし出仕ひこ
 悪多れを益の事よぬなり神文若き人其
 声の衰つ場をきくにきよへし但生得肺氣は弱き
 人ハ一向声とを好まぬおなり

我意をこまにいらしつゝいふとき

あつたやすく意音曲をせよ

らう門まにうたぬぬ物成つゝよ

かあはれきよはうはゆるすな

のきき聲をほくあつへきやうハ廣野又き川の漱か
 ぬ鳴所へ出てるた調子まで音曉は声をつよては
 庭まふあふもは後またう所まで視へん後心も
 人の耳もと細くゆめらおなり

細声成あつくあさしやうハ木陰かよハいけくまもむ
 ひきれあつていふもむき調子まで口れ内をゆ
 己と持口成か廣げて視へし能つゝいふ金皮そく
 スリコエ

一時音乃事

是ハハ聲を殺せんハやをぬやうに閉乃内之様

事なり但上より柿ツヤやうもあらんかすかよ遊んごやくよ
と行ふ丹田タニより声コエ出デ一腹ハラへ満ミつらうよ祝イハひえゆ
歌ウタなり也ナリれより反サカしる音ネにあぐ又反サカして下シてカノ丹田
へ反サカしてもつゝ心ココロは教スベシ通スするなり是コトをつふ時トキハ声コエの
出デ小コをえ下シ音ネ自由ジユウにぬおあり平ヘイ竟キョウ息イキをたゞひ聲コエ
音ネ此コノ源ネを探サグるクフクエマ如ニ一

○すり声コエエマのウ足タラシ足タラシれつまさ死シを組クミ腎ジンを乃ナリ也ナリ膝ヒザを何
く迄トキむらげ腹ハラを突ツキ出デ一息イキ成ナリ吞ツク半ハ初ハジメめき十ジュウ分フンより
勞ロウ練レンの上ノは三サン分フン迄トキもむる極キョク息イキをゆるめて出デすマ一イチ交カウ
めはする事コト教スベシ通スに及キ小コ時トキとのづと氣キ治チまり明メイの内ノに

息イキ満ミく自然シゼンと腹ハラ之ノあハなり其コノ時トキ丹田タニより聲コエれ出デるを
足タラシえて明メイ乃ナリ内ノもさうたひエマすマ也ナリ後ノチ口クチ息イキを指サシ一

儒道ニ静シユウ坐ザ 或ニ未ミ發ハツエマ 佛家ニ坐ザ 或ニ直チキ指シ
或ニ見ミ性シユウ

武ブ藝ゲイ 練レン 或ニ保ホウ氏シ

地チ多タ練レンハ流リウく又マタ移シるの發ハツ明メイ彼カ者シヤ是コト吉キチことと平ヘイ竟キョウ
丹田タニを練レン事コト也ナリ祈イハヒりを座ザ一ト滲シらぬやうに飛ヒ煉レンす
一ハツ音オン曲キョクハ發ハツ聲セイすマ心シンは棄ウバれル氣キ動ドウめ強キョウ一イチ先セン小コ
依ヨて常ジョウに心シンを忘ワスレめて音オン聲セイれ出デやう是コトやエマ也ナリ

神道ニ人ヒト者シヤ乃ナリ天下テンカ神物シモノ祭利サエリ 須ス掌シヤウ 靜シユウ 謚シ ことあり

○我ワらうラウを額ヒタケよてマるル如ニく作アツクき腹ハラを突ツキ出デ一イチ祝イハへは

声ハ裏^{ウラ}ヲをふきだ表^{オモ}込^コ通り聲^{コエ}やぐ版^{イタ}より出^デぬ扱^ツ
其後^{ノチ}すまゝをすも可^カあり足^タ初^{ハジ}心^{ココロ}の角^{ツノ}ハめ^メ氏^{ウヂ}侍^シも吉^{ヨシ}

一 聲ハ横^{ヨコ}堅^{カタ}の事^{コト}

一人^{ヒト}うたふ時^{トキ}ハ堅^{カタ}れ^レ声^{コエ}を^シは^シよ^テ幅^{ハシ}せ^テぬ^ヤうに^ニ穩^ウ
を^シ一^{ヒト}同^{ドウ}音^{オン}乃^ノ所^{トコロ}ハ横^{ヨコ}乃^ノ声^{コエ}成^ナる^ルに^ニ初^{ハジ}め^メ一^{ヒト}堅^{カタ}乃^ノ聲^{コエ}
を^シくり^リま^マて^テハ同^{ドウ}音^{オン}と^トなり^ルぬ^ルなり

一 響^{ヒビキ}乃^ノ事^{コト} 字彙ニ 影^{カゲ}之^ノ隨^シ歎^ソ響^{ヒビキ}之^ノ應^{オウ}聲^シ其^ノ捷^ス一^{ヒト}也^{ナリ}

響^{ヒビキ}乃^ノ音^{オン}声^{コエ}ハ響^{ヒビキ}乃^ノ調^{テウ}子^シハ^シ後^{ノチ}ハ^シお^オ也^{ナリ}廣^{ヒロ}き^キ場^バ所^{シヨ}狭^{ヒナ}き^キ場^バ所^{シヨ}
よ^シて^テ穩^ウ不^フ先^{セン}別^{ベツ}む^ムは^ハ響^{ヒビキ}き^キに^ニ後^{ノチ}令^{ノチ}丹^ニ田^{デン}より^{ヨリ}声^{コエ}を^シ出^デ
づ^クと^トく^クふ^フも^モ響^{ヒビキ}き^キ成^ナり^ル上^ウへ^ヘ響^{ヒビキ}き^キや^ヤう^ウよ^ヨ公^{キョウ}位^イへ^ヘ一^{ヒト}咽^{ノド}る^ル

聲^{コエ}の^ノ出^デる^ル事^{コト}を^シくり^リ思^シひ^ヒて^テハ上^ウ音^{オン}れ^レ不^フじ^ジ入^イて^テ音^{オン}曲^{キョク}さ^サえ^エぬ^ルお
なり^ル又^{マタ}し^シ入^イを^シ響^{ヒビキ}よ^ヨく^クと^トへ^ヘ響^{ヒビキ}き^キや^ヤう^ウ斗^ト思^シく^ク上^ウさ^サす^スを^シ一^{ヒト}
ハ^ハ偶^ウ別^{ベツ}して^シむ^ムの^ノ一^{ヒト}但^タ小^コ穩^ウた^タけ^ケる^ル初^{ハジ}め^メの^ノキ^キ切^キ居^イ不^フ或^ス
ハ上^ウ端^{タン}の^ノ同^{ドウ}音^{オン}へ^ヘ返^ヘす^ス不^フハ上^ウ音^{オン}よ^ヨそ^ソ初^{ハジ}め^メの^ノ末^マ必^{ヒツ}渡^{ワタ}さ^サ
を^シお^オり^リか^カや^ヤう^ウに^ニ所^{トコロ}を^シ少^シ掎^キゆ^ユ公^{キョウ}有^ユへ^ヘ一^{ヒト}懸^{ケン}して^シ腹^{ハラ}乃^ノ
を^シる^ルや^ヤう^ウ必^{ヒツ}多^タれ^レ響^{ヒビキ}乃^ノ所^{トコロ}あ^アる^ルや^ヤう^ウよ^ヨ字^ジえ^エ表^オは^ハ高^{タカ}め^メく^ク
を^シる^ルに^ニま^マの^ノ又^{マタ}鼻^{ハナ}へ^ヘ響^{ヒビキ}き^キ 是ハ唇内のかかれ 或^スハ^ハ牙^{キバ}へ^ヘ響^{ヒビキ}く 口中の
を^シき^キら^ラふ^フ其^ノ外^{ノチ}拍^{ハク}子^シあ^アひ^ヒ句^ク切^キの^ノ響^{ヒビキ}乃^ノ一^{ヒト}え^エき^キ一^{ヒト}こと^{コト}乃^ノ
句^ク切^キ文^{ブン}と^トた^タな^ナの^ノ句^ク切^キ響^{ヒビキ}き^キ止^トま^マる^ルあ^アく^クて^テハ其^ノ次^{ツギ}れ^レ
拍^{ハク}子^シあ^アま^マ又^{マタ}拍^{ハク}子^シな^ナる^ル所^{トコロ}も^モ響^{ヒビキ}乃^ノ一^{ヒト}邪^{ジャ}上^{ジョウ}ハ^ハ必^{ヒツ}ず^ズの^ノあり

内よまなり其陰息ハ即ち陽息ハ助けとなり聲ハ養
 ひをある物なり初ハ陰息ハ陽息の味ひを知ル陽息の
 ことをさして後ハ在に息も不足一或ハ浮調子に
 ぬく下音より中になら皆是陰息乃や一をひを動弁せ
 さら在なり上へして初ハ内より一もく後ハ下も皆それ
 く一陰息して陰陽乃息あつしは後分り但陰息と當
 らとすれ又し入やうも也あくハ口傳あつてハ明一強一
 又曰呼より吸よりつる糸に後息能くエます一
 △起して引下るは陽息陰息ハ是別と
 △ハル所を陽息あれも物字なると陰息を用ゆる所を

- △名ハハナリ上て陰息ハ一ハ律より陽息を用ゆる
- △入ハハ陰息也 但一字ハリハ入ハ一は陽息なり
- △息スハハ陽息より陰息へうつるなり
- △すくハハ陽息あれもツトスハハの前或ハ白切なり
- △そて陰息を用ゆる所有

- △下ルハハ陰息なり
- △中さげイロさげ 陰息よて音ハさげぬなり
- △ツトスハハ音息も又あすあり

又息逆等の事ハは未だ記さ

一呂律乃よりちれ事

九ツ和カ之

カガキ 堅

笑

泣

ふろ

かこ

呂

出息^{ニテ}祝言トス

律

入息^{ニテ}愁トス

聲ノ表^{オモテ}

聲ノ裏^{ウラ}

笛ノホウ

笛ノヒイ

音曲乃強吟より和吹よと呂律ハもあつて半ならずよ
も揺ふよと又下よて祝所も随ふと呂律有相
呂よと又高角徴羽の又声律よと又高角徴羽の又声
あり半竟又ハ呂れ又又ハ律の高あつて強よけてを

くごくよとへー陽中此陰。陰中乃陽こり半を忘ま
又声れうつりさ入融あはなをうろ叶へー呂律と偏り
時ハ呂をわうりて愁ひよ中又之律ハぎこりよ尖りてふ
に響すくあつてつめふ

起て湯よ湯を付法は陰を付てハ陰陽和合せん
おあろきさるるなり和合するを以て成就とよ

一祝言

こら^起おく^臆此聲

のころちを忘事

花傳書

是も呂律の三川より出たり 呂ハもろふ声出る息也
祝言れ声ハ機を祈りて機よ声成付て出ハ故是強キ
音聲よて呂の声れ性根なり機をとりて強き声息を
出ハ後にあつて一是呂よと祝声あは祝言第一也

△古書ニ 君臣れ役とり小捷ハうたし君も教臣も何
 ともてうかしくキル曲舞ハ教君もて進ハ臣
 なるにより察して祝ハキルや臣もさるる曲舞ハ
 内もと教に進ハ下とまき祝ハよきさう新とま共
 外もも進多あり

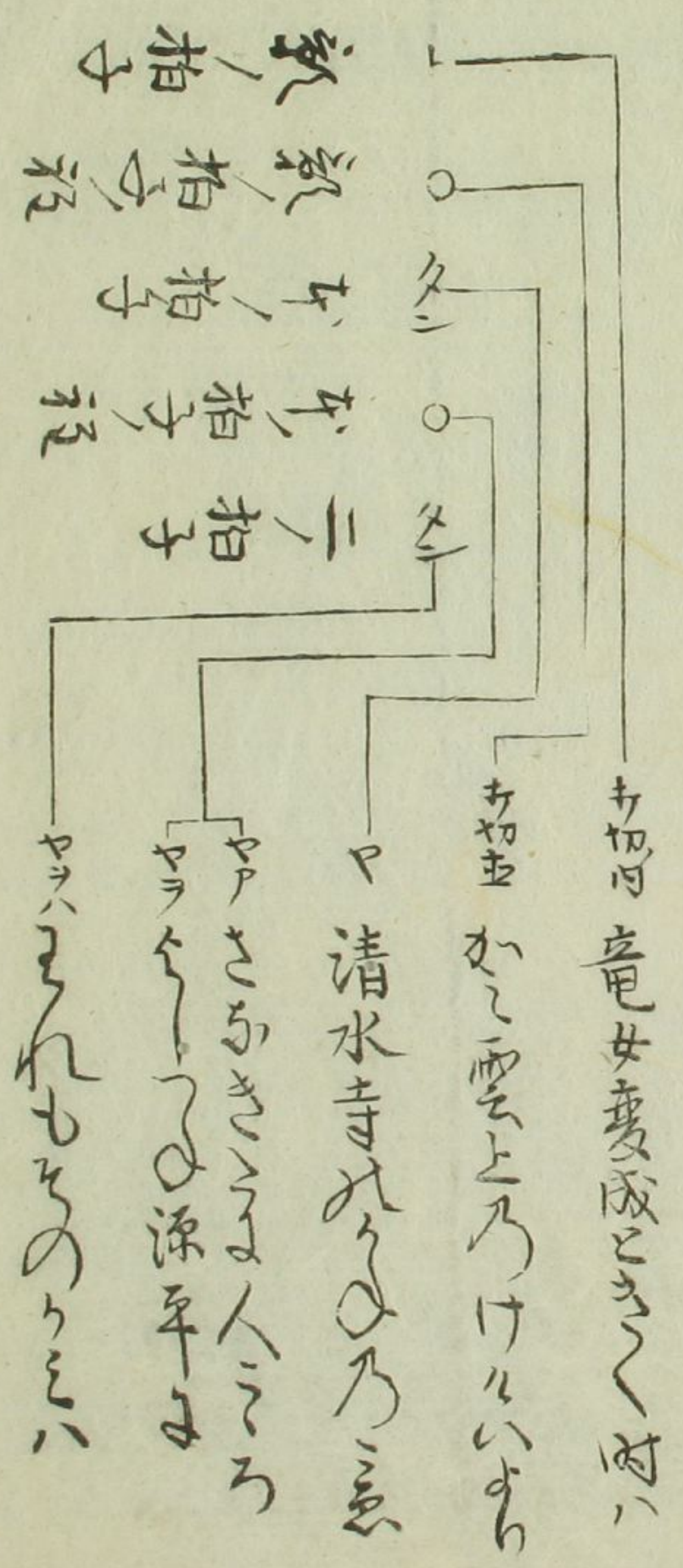
△うけ押の拍子れす下も乃進必拍子れ後を不待
 してよく出さ家おあり後を待さうけさ一乃拍子
 也子是強知され進もて教を進ハおあり

古書 角阿まはおのかさてむいりや
 只何ことまらしくさる

兄くともか二門あまきものう海
 阿まりのま海きはあらひ安きに
 此二首の心をめておキナ

・ 打切進出一は又拍子とりさる

是を又つの名也
 但進神の拍子も有る



三ノ

三ノ

并切て出レ示右又川の舟ハ節 或ハ廿地行此列ハ示ハ也

一進退の又拍子といふ

かく拍子 中 をく拍子
すむ拍子 ぬく拍子

△東北 三川のくハ拍子

後のうちハかく拍子

△鐘 情ハりハとハこハきハキ

後を不ハ符ハすハみハてハ出ス

△雲林 隆ハきハぬハるハるハるハハ

後をハくハとハ符ハをハとハれハてハ出ス

△融 池ハ切ハきハにハ宿ハ一ハスハラハハ

十ホハキハラハとハづハてハ奥ハトハとハてハ出ス

一キ又拍子といふ

素州の時ハ切ハ居ハ所ハ此ハ乃ハ扇ハ子ハ拍ハ子ハとハキハなり

△示ハるハ所ハの はとハれハらハキハ出ス ○○○○ハ拍ハ出ス

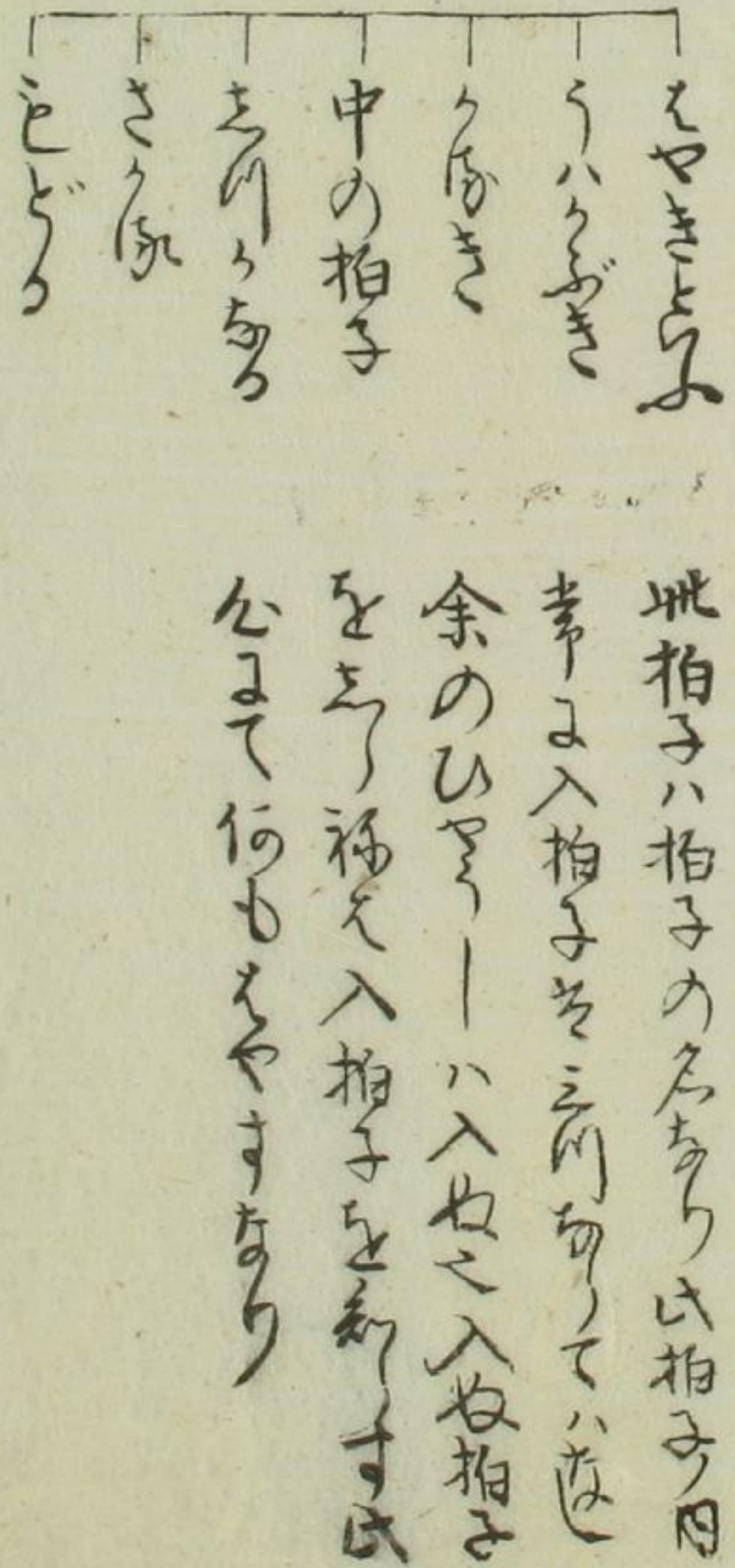
△明長 三世ハ十ハ方ハキハ切ハりハとハもハ明ハゆハ其ハ時ハきハ又ハ拍ハ子ハハハ也

一七ツ拍子といふ

仕舞の拍子

くもハ祝ハもハ入ス

↑



一キ一拍子といふ素州の扇拍子なり

△陽子ハむハ久ハ家ハをハ切ハりハくハハハ又ハ引ハ○ハ是ハ次ハまでハ一ハツハキハ也

△吉ハ海ハ又ハ叶ハふハ人ハ也ハ不ハ引ハ○ハわハ家ハきハくハくハよ

△新ハきハるハ所ハ此ハ列ハ末ハニハツハキ

わん一拍子の扇子をくつてハ必引末をさるおこひききとす

止トムへきとあれ扇拍子なり

一末スエの拍子とりよもね拍子あり

△ふゆと半ふくれは移引た。まろり
をさるーとあつて
出のハあき拍子

一四拍子とりよハ引えのられ扇拍子をもつ又羽乃キリれ扇

拍子をもつ四拍とりよ

△わくてもあひまわへまやまれちたりはまきまき
△あけきの家となりまろり

一松拍子とりよハ頭乃よりやうよて出くつら云

一今合ガッをーとしてあおま時弁切弁上の扇を扇拍子よて

うたより有をりよ
はらち切のろこ

△冥ためーを移ホトケモトハステ。仏もとハ捨ーをの

毛ハ後のまといぬひまろー位ち文ひてハ益益のすこ

一コウソツニ
口舌心の事 毛ヲ三曲ト云 喉舌唇三内ニナのすハ音便の巻ニ祀ヲ

口や舌あつれ三内ニの叶ひてろ

口舌心乃音曲とつよ

先文字あつひつぎやたすくといほひあれ不口れき
きなり其上に假名ほひ能いひまけ文字よと突乃入
てふもつぎれもなくあらくといつれをす不舌曲をり心
まは方法乃こりる不なり

賤老若男女喜怒哀樂愛惡欲の七情を去現をれ
 ち鬼畜の類ひ相意に其才は女代心にて
 是をどうもみともよ但あまり思ひ入るる
 て嬉しなり時節氣角座の機巧あり
 一心乃並所の事

碎六下を穩ふおとありんをれは心居て
 物く祝りんと思はまよを引きて穩
 とおへん又持まに心をさし拍子よ心
 あり酒をさしれ外がぬけ歌あり
 て曲を知ま曲忘ましく調子を
 知れ調子と忘まて拍子

を知らしむ 或はじはを歌。ハハハ
 ささましたるれをへあり
 心能はうひまをて何方へぬも
 ぬやうありぬ次れ入用よをく
 たり碎六下を穩ふおとありんをれは心居て
 のり酒をさしれおありぬ也或ハ
 くましくぬクリとしてハ

熟してトキツクひろ独吟れ曲舞あそび長くほめて稽小
所心を一所に居立てハ祝ひ居急ありめ家公有へ
極意は一身に心を賦^シりて其入丹れ取てまて休むべき
事^ニ 純煉^ニ 工夫の上になへきあり入り乃時其所へや家
へきと思へる行内よりぬけがすあり枝を枝向と考へに
多りて家も残すの取時よあれ拍子に心を賦^シりて
思存にあつて稽とこあり

本心如木 忘心如氷

忘るるを木と家すを氷と
これをとけを氷と

異相なるれを打ちけええりて

すくよれへき比をとりてあり

一 矩乃位れ事

第一文字を双へ平等なるは強ぬ事なり又前此字を伸^ク
まは後の字をむらひ又前乃字を捨^ヒて後乃字は
伸^ルなり是を寸六寸とも六寸寸乃位とも首なり此
定格也是を長短の所ともいひく文字はかりれ心の矩也^{カチ}
人子面白やせんそ前乃字を伸^ルて又後乃字を寸法
かへに乃がまは一尺二寸より伸^ルて是よりありびえり
くともより拍子よとをいへあり

一 序破急乃事

序ハ^{シツカシ} 破ハ^{スハム} 急ハ^{ハヤシ}

爾雅 序ハ緒也と訓して終る糸口と訓也糸くらを能

見定め引出せば未迄も礼ありやかー此席に曲も志
づりあうやう死やうにして早くとめく又静もなれやう
よ吹する事也物まとも席吟の時に表を去りて裏
はまきやうにをのつうまゆらまのなり

△破る拍子に常ありを守りて破る拍子に後又拍
を破り拍子よめ、まろく急きつむるん或は後にくま
て厚づりう文字を待たしむるも一方破るをりよあり
但らくに後能も拍子能とと一やうれり方よ後能ぬお也
一拍子よりハ下子のまざりり拍子を能くまおあせ其
ひやうしき後能に破りつあ捨つあたるを破る曲とらよ也

△急といハ急といて後ハ勢也とも急にはめむり此曲する
なり是れともいさくよハ此ハ急をキフ

△廻して序破急ハ後よりよ後より一を急とい

芭蕉 = 真行 急ききなり かののふま 序破急と

一 序冠乃事

破るハ序よ後出さばとらふ不也序よめ破りて出さば破り
てとめ急よく出さく急め急め也是即ち序冠の曲とい
ひく嗜む事也後中後ハ物とて視よも急め不ハ後初と
歌位よ後一但破の急までと序乃急よ急めをりとい
急ととら曲とら也

一花傳書曰只搖ハ聲ガ^{タイ}拍ヲ持曲舞ハ拍子ヲ^{タイ}拍ヲ持たに
 舞トシテ字を曲ニまゝり立て舞^ッわさなまは風傳より
 出ル音声也昔ハ曲舞ヲ各別乃^リまさまて^リつまひく^リ視^ル事
 ハかり^リを近代曲舞^ハ代^リつ^テ小^シう^シた^シひ^シを^付て
 視^ハは^殊に^面白^クす^やる^に當時ハ^殊文^曲舞^ハ此^ハ初^ニ第一
 乃^ハ^ヒと^あま^り是^レ亡^父^{世阿弥}申^樂能^ハ曲^舞を^搖出^シ
 たるに^りて^ハ曲^舞く^顔ひ^一也^白蟻^の曲^舞此^ハ曲^完初^ハり
 去^後に^曲舞^クこれ^曲を^は大^初う^たひ^と傳^り曲^舞此^ハ
 乃^ハ此^レを^わけ^視小^曲は^故に^亦に^曲の^道か^はら^しる
 事^ハ此^レの^中に^然ま^とも^面白^き乃^ハ肝^要を^持た^レ

是^レを^シテ^ハ事^ハ乃^ハ乃^ハ也^抑曲^舞搖^ひ乃^ハかり^りめ^と
 乃^ハハ^曲舞^ハ拍^子を^持て^視小^曲な^れん^文字^とん^拍子^ヲ
 持^トり^て文^字と^句後^もか^ら一^又拍^子に^引伸^けに
 なる^もく^所し^かま^る章^句さ^れた^一と^まに^はま^えて^面
 白^風中^ハ先^ハ拍^子れ^面白^き性^根あり^去に^依て^か
 介^海の^亦と^一種^乃か^りま^はす^也先^を曲^舞わ^る乃^ハ
 風^中と^ハ只^搖と^ハ拍^子よ^てか^き孰^事も^なく^只ま^れ
 ま^くに^搖小^故又^文字^の章^句紛^まる^去後^に謠^の臆^腦
 何^レれ^て乃^ハ言^をり^まて^一句^一曲^ハ乃^ハ乃^ハ延^年を
 持^トり^て心^を志^す乃^ハ搖^小人^も乃^ハ人^志同心^ハ一^曲感^心

子意凡物きは海この正風を巧くん有に文字と句う
 事と正あり其内は上もれとざとりの事正を能く
 と味あり正さむも也此きは声あやをあらとく事
 一有紋無紋の事しといふ事 正紋無紋よりん云

事とく白死おは思き紋くら死おは白き紋ハ有紋とて
 事也白き上に同一系とてあらき紋或は淺黄れへ
 淺黄乃紋を織^ル 是後此紋あり音声よしかは紋を付
 ぬ事^を以て^て聲^文文^成成^すといふ事

佛説は有心^{ウレシ}の事^ハ無心^{ムレシ}れ^てる^とり^ノ事^ハ有り
 有心^{ウレシ}ハ^{キヤク}公^トて^て極^ム事^也

